

第1回 外部評価委員会 議事録

日 時	平成17年12月3日(土) 午後1時30分		
場 所	サレジオ工業高等専門学校 会議室(231号室)		
出席者	外部評価委員 (小計5名)	委員長 坂田 亮 委員 塩田 一路 委員 檜山 竹生 委員 入谷 弘 委員 金子 誠司	慶応義塾大学名誉教授 工学院大学教授 株式会社エイビット代表取締役 八王子市立長房中学校校長 元芝浦工業大学教授
	サレジオ高専 (小計13名)	田中 次生 小島 勉 木戸 能史 安藤 昭 今野 義孝 大杉 功 小西 均 高橋 孝 森 幸男 小出由起夫 小澤 潔 横山 松生 高田 英一	校長 副校長 教務主事 学生主事 寮務主事 専攻科長 デザイン工学科主任 電気工学科主任 電子工学科主任代理 情報工学科主任 事務長 事務総括部長 学事資料室担当
配布資料	① 外部評価委員会実施要項 ② 学校要覧(2005) ③ 自己評価書(2005.10) ④ Info 2005 ⑤ Syllabus 2005 ⑥ 学校案内(2006)		

【議 事】 司会：木戸 教務主事

1. 開会(13:30)

2. 校長挨拶 田中校長

3. 会議出席者紹介 外部評価委員紹介(小島副校長)
サレジオ高専側紹介(木戸教務主事)

4. 学校概要紹介

① 学校沿革説明(校長)

設立の経緯、教育理念、校名変更に伴うシンボルマークのもつ意味合い

② 自己評価書について（副校長）

学校の構成（学科構成、教職員構成）

準学士課程、専攻科課程の教育目標と養成する人材像について解説

各学科及び専攻科の学習教育目標についての説明（各学科主任）

プレテックの組織、教育についての説明（学生主事）

学校組織について（教務主事）

学生寮について（寮務主事）

（休憩 15：10～15：25）

4. 意見交換（15：25～ 司会：教務主事）

入谷委員：生徒を送り出す中学側として、サレジオ高専の発展を願っている。ただ、中学側では貴校の中身がよく分からない。中身を分からせるための宣伝が大切であると思う。特に、地域に対する宣伝が必要。地域社会に学生の実態を見てもらう機会を積極的に作ること。外部から見て良い印象をつくるには外見をよくすることが大切。自校の経験から厳しく指導することでよくなる。また、在校生の親や卒業生の親を通して宣伝活動を行い地域にサレジオ高専の存在を印象付ける努力を行ったらどうか。学校宣伝には卒業後の進路状況を前面に出せばよい。

Q. 小澤：貴中学校の状況をどのようにして変えられたか。その方法は？

A. 入谷：教職員に厳しく対応させた。その結果については校長である自分が責任をとることを明言し、教員にやる気を出させた。また、親を改革する必要があったため、地域の中に入り込んだ。

Q. 塩田委員：学校の教育方針として、①エリートを育てるのか、②底辺の底上げをするのが目的か？

A. 木戸：能力的にも多様化する入学者をかかえ、プレッテック段階で底上げ教育を行う必要もある。ただし、これには多大の労力を要するし、上位者は伸び悩む。現在、どうするか悩んでいるのが現状である。

塩田委員：プロジェクト教育等を通して、上位者を引き上げることはできないか。プロジェクト活動を通してノーハウを継承し、教育の向上につなげる。又は、進学率を高めるなど・・・。（現状では、プロジェクトに何らかの形で参加している者、役 150 人。クラブ参加者 40%程度？）

金子委員：高専卒大学編入学生の教育は楽である。

プレッテック段階で混成学級を編成し、上級コース（A組）と普通コース（B～D組）に分けたのは何故か？

A. 安藤：A組は進学を目指す。現状では特に問題なし。授業はやり易い。

入谷委員：低学年における女子学生の増加に対応し、女性教員の導入が必要なのではな

いか。女性のATを入れることにより生徒の受けが違ってくるのではないだろうか。

金子委員：電気工学科では、電検目的だけでなくもっと広い科目設定が必要なのではないか。ロボット関連教育を一つの柱としているが、ロボットは電気ではないことを認識する必要があるのではないか。また、ロボットを含みマシニングセンタ、工房を実験の場とする機械系学科の設置を考えてはどうか。

A. 木戸：高専は大学と違い、殆んど全科目が必修であるため、幅広い科目設定が困難である。

Q. 金子：1年次科目に「表現」があり、複数教員が担当しているようだが内容はどのようなになっているのか？

A. 木戸：本年度からの新設科目であり、各教員別々の内容による教育を行っている。

Q. 木戸：現在、電子工学科は学生募集で苦勞しているがどうしたらよいか？

金子委員：1年次から電子工学を授業に導入し、電子工学の有用性と楽しさを知らせたらどうか。

A. 森：内部アプローチとして、低学年で制作演習を導入し力を入れている。

檜山委員：電子工学に関するPRが不足している（出来ていない）。電子の世界は5年毎に変化し、ターゲットが絞り難い面があるが、電子技術が我々の生活の中にもどのように生かされ活用されているか、子供達の遊びの中にも電子機器はあふれている。その具体例を見せ興味を呼び起こさせるようにしたらどうか。国際化グローバル化する電子技術、新しい物を産み出す想像力と宣伝が必要であらう。

坂田委員長：要覧（p7）中の表記の改定に関する提言

「高専」→「工業高等専門学校」と正式名称を明記すること。

中学卒業生を集めての高専教育は大変だと思う。他者への思いやりの教育の大切さを感じている。学校の成績と社会人としての伸び率の相関は如何なものか。学校の成績とは何を評価しているのか・・・等々考えると教えることの難しさに直面する。例えば、最初からノーベル賞をとるための研究をしたのでは駄目。興味や関心をもちこれは面白いと思ったことを発端とし、その問題を追求、研究することによりある種の成果が得られる。このような、「興味→追求→研究→成果」形の流れがよいのではないだろうか。即ち、学校という組織の中においても、低学年においては学科別にせず総合化した教育を施し、この間で何かに興味をもたせ2～3年後に（学科に）区分けしたらどうか。また、指導面においては、学生をほめること。興味を伸長させることの出来る環境作りが必要なのではないか。そのような意味において、金沢工業大学、東京工科大学等の見学を行ってみたらどうか。

木戸：これまではとにかく学校の枠内だけで検討してきた。今後は視野を広げ外部情報

を積極的に導入する必要があると思われる。

以上で意見交換会を終了する。

最後に、校長挨拶を以って第1回外部評価委員会を終了した。

なお、休憩時間後に予定されていた外部評価委員を対象とした校内見学は、会議開催前に実施したことを付記する。

次回外部評価委員会は、平成18年3月30日（木）午後1時より開催の予定。

以上

第2回 外部評価委員会 議事録

日 時	平成18年3月30日(木) 午後1時		
場 所	サレジオ工業高等専門学校 会議室(231号室)		
出席者	外部評価委員 (敬称略) (小計5名)	委員長 坂田 亮 委員 塩田 一路 委員 檜山 竹生 委員 入谷 弘 委員 金子 誠司	慶応義塾大学名誉教授 工学院大学教授 株式会社エイビット代表取締役 八王子市立長房中学校校長 元芝浦工業大学教授
	サレジオ高専	田中 次生 小島 勉 木戸 能史 安藤 昭 今野 義孝 大杉 功 小西 均 高橋 孝 広山 信朗 小出由起夫 小澤 潔 横山 松生 高田 英一	校長 副校長 教務主事 学生主事 寮務主事 専攻科長 デザイン工学科主任 電気工学科主任 電子工学科主任 情報工学科主任 事務長 事務総括部長 学事資料室担当 ○ 次年度管理職者 (括弧内は役職名) 鈴木 勝重 (校長) 山野辺基雄 (教務主事) 岸野 昭彦 (寮務主事) 島津 豊 (デザイン工学科長) 渡邊 聡 (電気工学科長) 森 幸男 (電子工学科長) 米山 秋文 (情報工学科長) 杉島 一男 (総合企画室長) 平岡 一則 (進路指導室長) 吉澤 伸幸 (技術交流センター長)

	(小計23名)	野島 伸仁 (一般教科主任) 山本 孝司 (プレテック主任)
--	---------	-----------------------------------

【会議次第】

(司会) 木戸教務主事

1. 開会 13:00
2. 校長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田中 校長
3. プレゼンテーション
 - ① 平成17年度レビュー報告・・・・・・・・・・ 木戸 教務主事
 - ② 平成17年度の目標と取組み・・・・・・・・・・ 小島 副校長
 - ③ 高等専門学校機関別認証評価に対する準備状況・・ 広山 認証評価委員長
 - ④ サレジオ高専の21世紀ビジョンと中期計画・・・・小島 副校長
4. プレゼンテーションに対する質疑応答 13:40～
 ----- (休憩 14:15～14:30) -----
5. 意見交換 14:30～
 外部有識者から見た「サレジオ高専の未来像」
6. 閉会 16:15

【議事録】

1. 開会 (司会: 木戸教務主事) (13:05～)
2. 校長挨拶 (田中校長)
 移転とその後の取組みについての報告と挨拶、新校長紹介。
 新校長挨拶 (鈴木新校長)
3. 外部評価委員自己紹介
4. プレゼンテーション (13:20～)
 - ① 平成17年度レビュー報告 (木戸教務主事)
 平成17年3月17日に学内において実施したレビュー概要について、配布した「レビュー報告書」に基づき下記項目につき説明が行われた。
 (資料: 「レビュー報告書」参照のこと)
 - 1) 主事部セッション報告
 学校運営組織 (教務部・学生部・寮務部・ミッション) と活動報告
 - 2) 学科セッション
 各学科報告、プレテック教育報告、専攻科報告、一般教育部門報告
 - 3) センターセッション報告
 総合メディアセンタ (図書館、情報館、HP)

応用技術センタ（夢工房とプロジェクト教育）

技術交流センタ（産学連携、学学連携（4大学間単位互換））

国際連携（サレジオ大学連合）

4) 学校業務運営・室セッション報告

総合企画室、進路指導室（就職・進学）、学生募集室、学生相談室

5) 評価統括委員会セッション報告

認証評価、授業評価・卒業生満足度、外部評価、研究評価等の概要

6) 学内統括委員会セッション報告

安全・防災・衛生、学生研修、ボランティア

7) 学外統括委員会セッション報告

単位互換、国際交流（ホームステイ・海外機関交流）、

校友支援（同窓会・父母会）

② 平成 17 年度の取組みについて（小島副校長）

1) 総合企画室による中期計画の平成 17 年度実施課題への取組み

新マネジメントプロジェクトの発足（7月）

ワーキングスタディに基づく現状業務分析報告（1月）

サレジオ版マネジメントシステムの提案（3月）

2) 評価統括委員会の活動

機関別認証評価→7年に1回受診が義務付けられている。本校は平成 20 年度に受診する予定である。そのための準備として、平成 17 年度「自己評価書」を、大学評価・学位授与機構の方針に従い作成した。

授業評価→授業評価の改善

外部評価→本年度 2 回実施した

③ 機関別認証評価について（広山認証・評価室長）

高専の認証評価について

法的根拠（学校教育法 69 条の 3.12 に公示）、

評価内容

実施機関→三機関（大学担当：大学基準協会、日本高等教育評価機構、
高専担当：大学評価・学位授与機構）あり。

本校の教育研究活動について→機構の定める評価の目的は質の保証、改善であり、本校独自の特色を打出す必要がある。

本年度受診校は、3 大学、1 短大、18 高専の計 23 校。全校合格となる。

④ 本校の平成 18 年度中期計画について（小島副校長）

ビジョン→建学の精神にたった、合理的にしてオープンなシステム

5つの取組み→基本精神の具現化

学校経営の健全化

教育・研究の質の向上
社会的責任への対応
意識変革の推進

* プレゼンテーション時間が延長したため、休憩（14：15～14：30）をとり、これに対する質疑応答は、14：30～とした。

5. プレゼンテーションに対する質疑応答（14：30～）

司会：フリーディスカッションとし、先ず各委員からコメントを頂きたい。

檜山委員：会社経営の観点から見れば、経営をしっかりと欲しい。定員の充足（退学者を減らし、入学者を増やす）。売上につながる方式、即ち企業価値を上げること。どれだけ学生が喜ぶ商品（教育）が提供できるか。親に対する教育面におけるPR、中心市街地におけるPR、商品を売るためのPRが必要である。また、委員に何を評価して欲しいのか明確にする必要がある。

吉澤：「学生天国」出展等を通して、八王子市に対するPRは行っている。

塩田委員：個々の取り組みはいいのかも知れないが、全体として各委員会が有機的にどのような係わり合い（機能連携、相互関連性）を持っているのか分からない。

金子委員：学生からの授業評価はどのようにして収集したのか。収集の方法によっては異なった結果が生じる場合もある。

高橋：学生に対し教員がアンケート用紙を配布し、各クラスの級長がこれを集め封筒に封入し、事務室教務課に提出している。

金子委員：アンケート集計結果を各教員に返し、次期授業に生かす工夫がされているか。

高橋：結果に対し教員は各自コメントを付し報告するようにしている。

入谷委員：公立校と違って私学は学生が集まらなければ経営は厳しい。公立の場合も学校選択制の導入による選択の自由化と厳しくなっている。この事実を教員はどのように受け止め教育に当たっているのか、危機意識はどうか。子供の数が減少している現在、学校経営への参加意識を持たないと駄目。公立中学に於いても授業公開、授業研究等に関する自己申告方式がとられ、これに対する中間報告、個人面談等も行われている。教職員の意識が変わる（意識改革）ことで学校が変わる。その目的に対する努力と応援は必要である。募集について都立高も積極的に行動しており、少子化に際し新しい学校作りを目指している。全員が一致しなければよい方向には向かって行かない。

司会：まさに身に染む思いである。

坂田委員：前回の会議の際、他山の石として訪問見学をお奨めした金沢工大、東京工科大学、東京高専等へどなたか行かれたか。

広山：認証評価の関係で金沢高専に行った。大変よい勉強になった。

小澤：東京高専より教員を招聘し情報収集等を行っている。

司会：金沢工大と金沢高専との間では見事な連携がされていると伺っている。

坂田委員：金沢工大は特色のある教育を行っている。また、以前から少子化を意識しこれに対応する対策を講じている。また、東京工科大では、内部からの意見を尊重し、現場の声を反映する懐の広い組織を持っている。

当校においても広く情報収集し、独自性の確立が必要である。特に、カトリック精神をどのように教育に生かすか考えて見る必要がある。

また、ゆとり教育は必要だが、その真意が伝わらず結果として学生を甘やかしレベル低下をもたらしてきた。特に理数系が問題である。学力不足を補充し、ばらつきを埋める方策を考え実行する必要がある。折角いろいろな組織を使ったのならこれを活用しなければならない。鉄は熱いうちに打て。

当校においては、下からの意見を汲み上げると共に、カトリック精神に基づいた教育を行う必要がある。

司会：東京高専においては、1年生の学力を向上させるための教育が行われている。

入谷委員：勤務校でも数学はTT方式を導入し、少人数教育を行っている。学校によって違うが、評価レベルに違いがあるのではないか。底辺学生の学力の底上げをする補足教育が必要であり、このシステムを構築することが学校としての売りともなる。要は、いつでもリカバリーできる体制があれば、親が安心できる。このような方策が必要である。

司会：絶対評価としての平均「3」は非常に幅広い。本校に於いて推薦入学者に対し学力テストをした結果低学力者も含まれている。これまではこれらの者に対しては、教員個人の努力で補ってきた。

山本：本校では、土曜日の補習で対応している。金沢工大では、基礎教育センターで基礎を習得させている。

塩田委員：工学院大学では、学習支援センターを設け、高校教員OB4人が指導に当たっている。当校の場合には、中学教員OBや塾講師が対応できるのではないか。

この講座を自由選択制にすると、受けなければならない駄目な者は受けないので自由選択制にすべきではない。

高橋：学力不足を補う話題となっているが勉強の嫌いな者はどうやってもやらない。このような者に対しては「ものづくり」をやらせモチベーションを高めたらどうか。

塩田委員：物理や数学のように抽象的な科目を学生は苦手としている。従って、目的意識を明確にしてやるために科目間の連携を取り、各科目の壁を越えて各分野をいろいろの教員が教えることにより、物理や数学の一般的応用や適用を知らしめることによりモチベーションが上がっている。

高橋：目的を明確にして行うプロジェクト教育を科目に組入れている（創造設計等）

山野辺：各学科の基幹科目とは何か。カリキュラムのなかで煮詰まっていない。幹と枝の

区分を明確にする必要がある。

入谷委員：いろいろの意見を収集することが必要である。フランクに意見を出しあい、それを吸い上げ、管理者はそれを具現化する。どのような意見も抑えてはならない。

山野辺：入学者に対する補習法とその効果は？

塩田委員：初めは空き時間を活用した。専門は重要とされる点を中心とした。何が重要かを抽出し個別に対応した。

高橋：高専の場合はビッシリ時間が埋まっているので無理。バラ色の学校生活とは程遠いものになる。

司会：応用に結びつけた具体的教育方策を行ったらどうか。

野島：確かに入学者のレベルは低い。低学年ではTT等を通し基礎学力を養い、高学年での専門的要求に応えられるようになればよい。

入谷委員：中学英語は最近ヒヤリングに傾いてきた。

檜山委員：企業側の受入から見ると、①人間性 ②ものづくりに興味 ③「0」の学生が望ましい。一般教育と専門教育（理論と適用）互いのフィードバックが必要。自分の学生時代は、先生方が援助してくれたので学校生活は楽しかった。そのようなシステムが今うまく働いているのか。

司会：現状では底辺学生の面倒見で手一杯。上位者のフォローに追いつかない、力を伸ばしきれないのが現状である。

塩田委員：入学時の成績と1年後の成績の相関なし。モチベーションの問題である。

モチベーションを高める方法とは？

高橋：電気工学科では、1～2年生を対象にメカトロに関する制作実験を行っている。特別の制約もなく、自由に伸び伸びとしている。

渡邊：プロジェクト教育（工房内）を1年間やっつの感想＝学年、学科を越えて、技術面での相互補完をしながら同一の目的を追求しながら頑張った。他の者が何をたったのかが見えたこともよかった。

坂田委員：組織とは人の集まりである。若い教員、意欲ある教員が研究成果を挙げられる体制作り。学外との連携も必要である。

学校での成績は社会で反映するとは限らない。成績だけではない、勉強のための勉強では意味がない。本人の意欲と目的意識が大切である。

金子委員：今の時代はデジタル時代と言われているが、教育はアナログ方式がよい。基礎となるアナログが必要である。企業でも本当のアナログ設計者を求めている。

小島：本校の将来を考えたとき、現行の電気系3学科を改組または再編し、機械系要素を導入する可能性についての意見を聴きたい。（問題提起）

金子委員：電気と電子工学科を統合し、電気機械工学科を設置したらどうか。電気も機械も基幹工学である。

檜山委員：一般には現行の電気と電子の結びつき（関連性）がよく分からないのではない

か。名前が変わっても中身が変わらなければ意味がない。アジア系は電気・電子系に、白人系は情報・経営・金融が強いとされている。

高田：メカトロの本場、愛知県でも地域ニーズ、応募状況を考え学科改組等が現在行われている（事例：愛知県立東山工業高校（北村知明校長からの情報） 設備工業科→募集停止、自動制御科→電気制御科に改組）。

入谷委員：近隣の片倉高校も、ものづくり総合高校（デザインと情報）として新発足する。都立と私立の違いを明確に、どうやって学生を集めるか。これが自分たちのやろうとしていることにつながって来るのではないか。